シーボンに入社してから･･･

辞めたいなんて、思ったことはありません！！

株式会社シーボン

（化粧品製造販売業／上三川町）
【雇用障害者数】９名

生産部総務経理課で働くＲさん（身体障害）について、同課の佐藤さん（マネージャー）と須藤さんにお伺いしました。

【採用・雇用のきっかけ】

Ｒさんの場合は、障害者合同面接会場で面接を行いました。
面接会では明るく熱意が感じられ、来客対応など接客もこなせそうに見えました。また前職が事務職でＰＣスキルも充分にあったことから、受付・事務職での採用としました。

【雇用に際しての取組】

●　アプローチ１　障害者雇用に関する社内への理解、周知から採用後の様子の把握

シーボンでは、障害者を雇用する時には、生産部内のマネージャー会議において報告され、その後、各部署で行われる朝礼で、マネージャーから従業員全員へ周知されます。

また、新入社員に対しては、入社後のマナー研修で障害者の特性や、廊下にミラーがあることなど設備面の理由を説明し、理解を促しています。

●　アプローチ２　支援機関とのつながり

聴覚障害者がすでに１名勤務していたこともあり、同じ障害種別での求人をハローワークに依頼しました。その後、聴覚障害者のみの面接会を開催しました。

その結果、３名の雇用につながり定着しています。Ｒさんのケースもハローワーク主催の障害者合同面接会での採用であり、窓口としてハローワークは欠かせません。

障害者支援機関などから職場実習の申し入れもありますが、短期間の体験実習のみの受入れは難しいと判断しています。その反面、雇用を前提とした実習ならば、ぜひ受入れを検討したいと考えています。

【職場定着のための配慮・工夫など】

Ｒさんは自分で考えて行動できるので、特に配慮・工夫はしていません。他の聴覚障害者に対しては、手話通訳を活用しています。例えば、月１回の全体朝礼、セミナー、年に数回行う「障害者面談」には手話通訳者が同席します。これにより、周知する内容に見落としがなくなります。

また、雇用が決まり職務選定を行った部署での就労を開始した後も、障害者の適性に合わせ、適材適所となる異動が可能です。

それぞれが能力を発揮できるような配慮を心掛けています。

【現状と今後の課題】

企業としては、実習を行った後、雇用につながっていくことが理想の流れと考えています。実習時期、期間など臨機応変に対応してもらうことで受入れの幅が広がり、その結果雇用に結びつく可能性も増えてくると考えていますが、現状では実施できていません。

企業と支援機関が意見交換などで互いの事情を理解し、雇用につなげていくために歩み寄ることが今後の課題として挙げられます。

Ｒさんについては、同僚も安心しているようです。こちらが指示する前に自分で考え行動しています。強いて言えば、充分なスキルを持っているので、さらに自信を持って業務に携わってもらいたいと思います。

【Ｒさん（３０代女性）へのインタビュー】

Ｑ．現在はどんな仕事をしていますか？

Ａ．受付業務、経理業務、ハローワークに係わる業務などを担当しています。ＰＣスキル（ワード・エクセル）は中級程度です。

Ｑ．現在の仕事はどうですか？

Ａ．総務経理課の仕事は、健康診断など生産部全体の社員と関わっていく業務です。他部署とのコミュニケーションは大切ですので、これからは多くの人とコミュニケーションを深めていきたいと思っています。

笑顔の電話対応

Ｑ．今の職場はどうですか？

Ａ．今の職場は雰囲気が良く、仕事がしやすいと思っています。
私は固い雰囲気の中では仕事がしづらいので、雑談ができるなど和んだ感じが良いです。
以前は仕事のことで聞きたいことがあっても、皆さん仕事に集中され、話しかけていいかどうかもわかりませんでしたが、「わからなかったらいつでも声を掛けて」と言ってもらえたことで、相談しやすくなりました。任される仕事が増えて自信がつきましたし、私が必要と思われていることはとても嬉しいことです。その反面、期待を裏切れないと思い、ミスが続く

と不安になってしまいます。でも、ミスをした瞬間は気持ちが沈みますが、立ち直りも早いです。

Ｑ．将来の目標はありますか？

Ａ．今の業務が好きなので、経理・総務関係のことをもっと知りたいと思っています。そのため、簿記など仕事に役立てる資格を取得し、ステップアップすることが目標です。今までは同じ会社で勤務し続けたいと思ったことはありませんでしたが、この会社に勤務して５年間、一度も辞めたいと思ったことはありません。

会社との相性や居心地が良く、仕事をしていて苦痛を感じたことがありません。

今はこの会社でずっと長く勤め、もっと多くの仕事がしたいと思っています。

【取材を終えて～取材担当者コラム】

Ｒさんが他のスタッフとも楽しげに、笑顔で仕事をしている様子が印象的でした。手が不自由なため、来客応対のお茶を出す際、お盆の持ち方を自身で工夫しているそうです。

Ｒさんは＜障害＞を個性と捉え、「(障害者の方は）できないことも多いでしょうが、できることもあることに気付いてほしい」と笑顔で語ってくれましたが、見えないところでの本人の努力も素晴らしい、と感服しました。